タイ・カセサート大学単位互換プログラム
月末報告書（９月・１０月分）
獣医学類５年　吉岡莉子（Riko Yoshioka）

早くも、こちらのタイ・カセサート大学単位互換プログラムが始まり、１カ月と２週間が経ちました。タイでの毎日は新たな発見に満ち溢れており、自身の獣医学とタイの文化に関する知見の深まりを日々感じることができています。今回のレポートでは、こちらの留学プログラムの約半分が終了した現在までの私の日々を記します。

１週目：Pathology ユニット（９月２１日～９月２５日）
この週は組織学や寄生虫学の座学から始まり、主に赤血球に関する疾病について教えていただきました。その後、座学で学んだことを生かして、アヒルの解剖や PCR を用いたバベシアやタイレリアなどの赤血球寄生虫の判定、免疫組織化学染色によるアデノウイルスの感染有無の確認を行いました。アヒルの解剖では、と殺前に頚静脈と足の血管からの採血を経験しました。酪農学園大学において、何回か他の動物においての採血の経験はあったのですが、経験数が少なかったので採血に対し苦手意識がありました。先生方の丁寧なご指導なおかげでこれを機会にその苦手意識が薄れました。このユニットの最終日には、１週間を通して学んだことについてのプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションの最後には実験室で行った PCR で得られた不思議な結果に関し先生方と議論をしました。先生方は私が納得するまで説明をしてくださり、PCR や赤血球寄生虫に関し、より詳しくなりました。


免疫

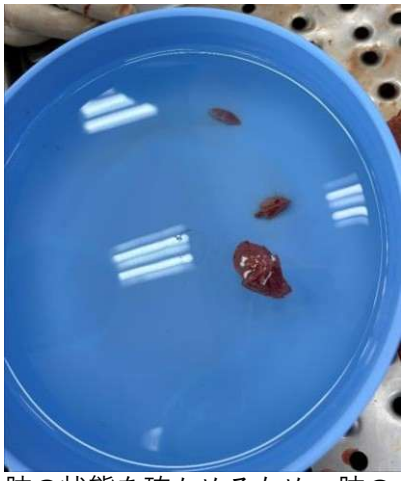
化学組織染色の様子



PCR の結果

２週目：Swine ユニット（９月２８日～１０月２日）
このユニットでは豚の農場への訪問や子豚の剖検を行いました。豚の農場では、その農場で行われている豚の飼育方法を、農場内を見学しながら農家さんに教えていただきました。この農家さんは豚の糞を池に集め、そこでアルテミアという動物プランクトンを飼育し、そのアルテミアを魚の餌にしていました。この魚は市場において売ることができるとのことでした。この一連の流れがこの１つの農場で行われていると聞き、そのしっかりとした生物循環システムに驚かされました。子豚の剖検は、持続的な努力性呼吸や下痢、削痩などそれぞれ様々な症状を持つ子豚を対象に行いました。剖検前に聞いていた症状と剖検により得られた臓器の変化の様子が病理学的に結びつく瞬間が興味深かったです。剖検後には、剖検を行った子豚の疾病を特定するため、どのような質問を農家さんに聞いたらよいかについて同じ留学プログラムの仲間たちと話し合いをしました。今回から北海道大学の学生も加わり、大人数での話し合いになりました。自身では思いつかなかった考えを多く聞くことができ、他者と話し合うことの大切さに気付かされました。


訪れた豚農場での子豚


肺の状態を確かめるため、肺の一部を水に浮かせる実験

３週目：Equine ユニット（１０月５日～１０月９日）
このユニットでは実際に馬の農場への訪問や、大学病院にきた患者馬の治療を見学しました。馬の農場では、基本的な馬の身体検査を行い、実際に馬が走っている様子を観察し体のどこに異常があるかを考えました。馬が走っている様子から異常を見つけるのは私にとってかなり難しく感じました。また、馬への駆虫薬の経口投与も経験しました。私はこれまで馬と多く関わっていなかったため、馬に近づくことに少し抵抗がありました。今回どうしたら安全に馬に近づけるかを教えていただき、その抵抗感をなくすことができたと感じています。大学病院にきた患者馬はそれぞれ様々な疾病を持っていました。その中でも顔の両側に大きなふくらみができた症例が印象に残っています。その手術様子も見学したのですが、ふくらみを開けると中から真っ黒な塊が出てきました。その塊はゴムのような性状で、このことに加えその他の身体症状からメラノーマではないかと予想がされました。この症例について、友人や先生方と今後の治療について話し合いをしました。症状からすでにかなり病状が進行している様子が考えられ、対症療法が最適かもしれないという結論を聞き少し悲しい気持ちになりました。これまで、１頭の馬に対しこんなにも考えを巡らせたことはなかったので、とても良い経験になりました。


カセサート大学病院での患者馬
における顔の両側にみられたふくらみ


顔のふくらみの中にあった黒い塊

４週目：Ruminant ユニット（１０月１２日～１０月１６日）
このユニットでは Nong pho という地域に移動し、普段泊っている Kamphaeng Saen 寮とは別の寮に泊まりながら実習に参加しました。主にこの地域の牛や山羊の農場へ訪問しタイの農場の現状を知ることに加え、寮の近くの動物病院に来る患者牛や山羊、羊の治療法を見学しました。農場によってその設備や飼育方法が異なっており、先生方がその農場の良い点と悪い点を教えてくださいました。日本では当たり前にある防疫用の消毒設備がタイにおいては、大きい農場にしかないことに驚きました。また、暑さに弱いホルスタインを飼育するため、大きな農場には立派なスプリンクラーや大型の扇風機が多く設置されていました。日本の牛の農場でも同じような防熱対策を見たことがあったので、暑い季節が続くタイでも同じなのだと思いました。そして、このユニットで一番数をこなしたのは直腸検査です。数日間にわたり、行く農場ごとに数回直腸検査をさせていただきました。私は今回が初めての経験だったのですが、先生方や友人が何度も丁寧に教えてくださったおかげで、完璧ではないですがおおまかに直腸から子宮や卵巣、卵胞、黄体の構造を触知できるようになりました。


大きな農場における消毒槽


１日の最後に訪れた農場で運よくみることができた山羊の出産


大きな農場における防熱対策のスプリンクラー（青いパイプ）と大型の扇風機

５週目：Exotic ユニット（１０月１９日～１０月２３日）
このユニットでは大学病院にきた兎や亀、ハムスターなどの治療を体験することに加え、亀農場やエレファントパークに行きました。カセサート大学病院で行った兎の鼻の状態を確認するために行う、兎の涙鼻管に生理食塩水を通す検査は少し緊張しました。この検査は日本でも行われていて、動物病院にて見たことはあったのですが、その時からこれまでずっと私にとっては難しそうだと感じていました。ですが、実際にやってみると思っていたよりも簡単にでき、無事１つのスキルを習得することができました。亀農場には想像を超えるほど多くの亀がいて思わず笑ってしまいました。ここでは、亀に対する注射やレントゲンの補助を体験しました。亀に注射をしようとした際、亀が甲羅の中に逃げようとしたために針が曲がったときは亀の力強さを感じました。エレファントパークにおいては写真撮影や乗用に飼われている象への治療の様子を見学しました。象への心臓のエコーをする際には、象の皮膚の分厚さ故に、先生がかなり強くプローブを押し当てているにも関わらず心臓がはっきりと写し出されていない様子がうかがえました。


亀のレントゲンの様子


猛禽類に関する実習

６週目：Ruminant ユニット（１０月２６日～１０月３０日）
この２週目の Ruminant ユニットでは、１週目の Nong pho の実習とは異なりカセサート大学病院に訪れた患者牛や大学付近の牛や山羊の農場を訪れ治療を見学しました。一番印象に残っている症例は、疥癬ダニに寄生された山羊のものでした。私たちがこの農場に訪れた時にはすでに皮膚が赤くただれ、疲れきった様子で私たちは心配をしていました。診断は疥癬ダニだと聞いて、日本での授業においてかなり辛い寄生虫症とは聞いていたのですが、ここまでかとその辛さを実感しました。最終日にはグループでこのユニットで見学した１つの症例に関し紹介するプレゼンテーションをおこないました。私が紹介した症例の牛は Indu Brazil という品種で日本では見かけない形をしていました。プレゼンテーションの準備の一環としてこの品種に関し調べていたのですが、その特徴がとても興味深く感じました。


Indu Brazil という品種の牛

休日
私は主にカンペンセンのカセサート大学周辺で過ごしていました。大学内にはフクロウやリスなど多くの野生動物がすんでおり、寮前の池ではどの時間帯においてもバードウォッチングを楽しむことができました。また、時にはタイ現地の学生とバドミントンや食事を楽しみました。一緒に出掛けた帰り道に大学内でホタルの大群に出会ったのはとても素敵な思い出です。タイの首都であるバンコクにも数回行きました。バンコクの街並みは日本の都会に非常に似ており、日本食や日本語をたくさん見かけることができました。歩いている途中で自身がいるところが日本なのかタイなのかわからなくなるほどでした。バンコク滞在中に行った保護猫カフェとスネークパークはかなり印象に残っています。保護猫カフェでは、多くの猫が暮らしており利用者の猫カフェにおける食事代などを猫の飼育費に充てていました。実際に譲渡活動も行われており、このカフェ自体が譲渡活動の一環となっていました。猫たちが気持ちよさそうに寝ている様子や元気に走り回っている様子をみて心が和むと同時に良い施設だと感じました。スネークパークはタイ赤十字病院の一部にあり、多くのヘビが飼育されていました。この施設においてコブラを私は人生で初めて見たのですが、そのつちのこのような頭の形に驚きました。こちらの施設では飼育されているヘビを見るのに加え、ヘビの特性やヘビに噛まれたときの対処法について詳しく知ることができます。私自身、ヘビが好きなのでこの施設はとても興味深かったです。



バンコクのアソーク駅にある猫カフェ


猫カフェで心地よさそうに眠る子猫



カセサート・カンペンセン寮前の池



スネークパークにいたコブラ

まとめ

この留学には英語力の上達も目標の１つに持ち、参加しました。渡航前から少し言語において困らないだろうかと不安に感じていました。実際、時に英語が聞き取れないこともありましたが、先生や友人に質問をする中で英語を用い多くの知識を得ることができていると感じています。また、この過程を通して日本にいたときに感じていた英語を話すことへの不安感が少しずつ薄れてきているとも思います。話は変わりますが、私は２週目と３週目にかけて風邪をひき、数日間、寮で休息をとっていました。楽しみにしていた授業に出席できないことやなれない土地で体調を崩すことは思った以上に辛く感じました。ですが、カセサート大学の先生が病院に付き添ってくださり、現在は回復し元気よく生活できています。親身に対応してくださったカセサート大学と酪農学園大学の先生方、心配してくれたともに留学をしている友人たちには感謝の気持ちでいっぱいです。